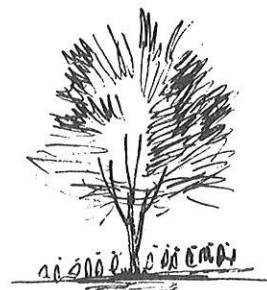


光の子



No.107 2004. 1. 1

●今年の聖句 悪を持って悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。(ペテロの手紙Ⅰ：3：9)

新しい年に

上よりの恵みがありますようお祈り致します

社会福祉法人 光の子どもの家



teko.

「よいお年を」

挿絵・中島英子

「鏡餅」

大櫓はだのがくりと年の改まる

初松籟まぶしき沖を展げたり

山の日の沁みこんでゐる鏡餅

ままことの客にされをりちゃんちゃんこ

村じゅうで叩きはじめし千蒲団

初富士の掠めるものを許さざる

夕富士へ胸をそろへて浮寝鴨

黛 執 (『春野』主宰)

とは別の国立大学法人とすることによって、既存の独立法人と区別し、経済効率を主旨とするものではないと、文部科学省から繰り返し説明を受けた（このことは政府

学者もどきのつづやき ⑥

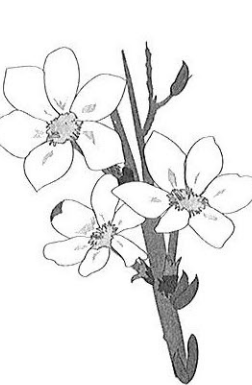
「いまどきの大学で」

山形大学 仙道 富士郎
学長

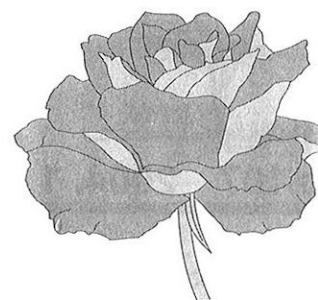
た教職員は公務員ではなく、法人の職員となる。国の行政組織の法人化は、軽い政府を作るための人減らし、金減らし方策としてすでにお手本があり、現在約60の独立法人がすでに存在している。国立大学の法人化にあたっては、これを独立法人とはせず、これ

の予算折衝でかなりあやしくなりはじめているのだが。さて、我が国の国立大学は明治の世に国を發展させる礎となる人材を育成するために設立され、歴史的に大きな役割を果たしてきたことは間違いない。また時の権力に抗して、国の進むべき道を指し示したことも多い。しかし、100年以上の長い歴史を経て、組織が、そしてそこに居住する人々が膠着化してしまい、「学問の自由」、「大学の自治」という言葉はよく大学の住人から発せられるが、自由に学問を展開するための空翔る翼も、検証しながら自己改革していくための地についた自治の足も消耗してしまっているように見える。このような状況下で、大学に裁量の幅が与えられる今回の法人化は、国立大学に対する一つの大きな刺激になるだろうと思う。また「学問の自由」を錦のみはたに、何もしいないことの勝手さを「自由」という言葉でカモフラージュしてきた輩にはつらいことになるかもしれない。前にも書いたような気がするが、仕事の評価を受けずに自動的に昇給してきた（過去形にしたのは、

これからはそのようなことはなくなるだろうという予想に基づいてそう書いた）人種は、世界広しと言えども、我が国の国立大学の教官だけである。今回の法人化にとってもなつて、何らかの形で教官個人の評価の機構が導入されるはずで、国立大学も社会の構成単位の一つとして成人の仲間入りをすることになる。従来我が国の大学、とくに国立大学で物事を決定するときの大変時間のかかるシステムを御存じだろうか。まず各学部から選出された委員によって構成されると、委員会、問題が提起されると、その多くは委員が学部を持ち帰って各学部の教授会で討論し、一定の決議を得たのち、それを各学部の意見をもとに・・・委員会再度討論する。そこで得られた結論は委員長から、大学の最高決議機関である評議会へ報告され、そこで討論される。大切なものは評議会の結論をまた各学部の教授会へ持ち帰って、その可否を問う・・・といったプロセスが延々と続くのである。会議、会議で教官達は本当に研究したり、教育したりする時間があるのだろうかと思いたくなるほど

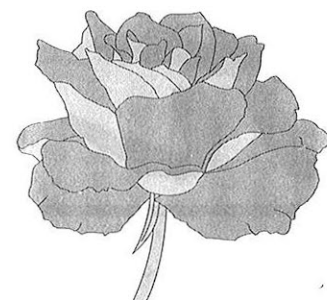


である。法人化にともなつて、以上のような大学の物事の決定プロセスは大きく変わる。学長の権限が強くなつて、多くの事柄の決定はトップダウン方式で行われるようになる。しかし、「待てよ」と思う。脳動脈硬化に陥つた学長からひねり出される「妙案」は、多くの場合「奇案」である可能性が高い。何しろ、民間の社長と違って、私をも含めた学長は、研究、教育の経験はつんでいても、大学の経営に携わったことなどは全くないのだから。いま私が腐心しているのは、いかにして現場の声を掬い上げ、それを基盤にして、学長が先頭に立つて事を行っていくシステムを作りあげるかについてである。「ボトムアップ」に基づいた「トップダウン」これが法人化に向けての私のスローガンの一つである。本当にうまくいくのだろうか。にわか大学社長はいかに不安である。



この年に

施設長 菅原 哲男



新年のご挨拶を申し上げます。この年もよろしく願ひ致します。さて、二〇〇〇年に子どもの虐待防止法が制定されてその見直しのための改正案が策定される一方、児童福祉法の改正も目前である。昨年のほば四ヶ月かけて行われた法改正のための社会的養護のあり方に関する専門委員会の議事録に目を通して見た。社会的養護の定義について約三回の委員会が費やされるような状況ではじまり、前後しながら、予防としての地域の社会的養護のあり方、相談機関におけるアセスメント、里親、乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、児童自立支援施設、自立援助ホームなどの社会的養護そのものの全体のパラダイムを大きく転換することなど画期的な鋭い議論が、特に日常的に子どもとギリギリのところに関わっている施設長や医師などの発言が印象的だった。それにしても施設養護の小規模化と地域への分散化がアブリオリに大きな流れになったことは昔日の思いに胸塞がれる思いである。二十一年前、光の子どもの家の最初の計画を担当課で説明した時のことを鮮明に思い出すのである。三ヶ所の飛び地に十名ずつの子ど

もが生活する二階建ての家を三軒と、少し広い土地に事務所など管理部門とみんなが集まるホールなどを設けるといふ構想なのであった。それを半分程まで聞いた担当係長は、「君、何を造ろうという計画なんだね？」と叫んだ。「あの子どもたちが気兼ねなく暮らす家を造りたいと・・・と私。何を夢みたいなことを言ってるんだ。施設を作る話だっただろう！」と、真つ赤な顔で怒鳴つたのである。それから都合四〇五回ほど訂正のご指導を受け、三ヶ所が一ヶ所に、一ヶ所に出来るだけ離して一戸建てを造る話も消え、とうとう三軒を連棟型に形を変え、あまつさえ各家の隣り合う壁にドアを付けるとご指導まで頂いた。資金のこともあつて仕方なく、俊秀の設計士たちと、連なる長屋のような連棟型の三軒の家は、せめて隣の家との間に出来るだけ個性を持たせるために、ジグザグに位置して隣家の窓と窓とで互いに顔が見えないよう工夫を凝らしたのだった。さすがに、隣り合う家の壁に設けたドアは造る前から認可を得たらすぐに塞ぐ手はずだったので今は壁になっていて。しかし、創意を理解しない役人の思いを記念するために南側の家を隔てる壁のドアは塞いだ

ノブをそのままにして、設立当時の県の担当課の思想のモニタメントとして今も残してある。専門委員会の議論が実現したらこの国の社会的養護は飛躍的に進化するだろうと心躍るものだった。しかし、多くの注文は残る。特に自立を支援するということがだけが騒がしく、自立の目安の年齢の結論がないことは問題である。児童年齢は十八歳と決められている。児童福祉法一九九七年改正で自立支援を目的に加え、十八歳を超える措置延長という思想も制度化された。しかし、法成立直後の当時の厚生省担当課長の通知で、措置延長制度は殆ど使えないものにならない規制が付けられた。特に地方行政は、法の精神を生かすことよりも中央省庁の課長などのレベルでも通知などを優先して実施しているのが実情なのである。だから、大きな志をもつ児童養護施設の高卒の子どもたちは、進学などに何の助力を得ることも出来ず、生活と教育費を自力でまかなえる者だけにしか許されてはいない。それが今度も解決されていないのである。まだ重要な論点のいくつかは残っているが、今後の機会に論ずるつもりである。

エッセイ

市原多朗さんのうた

彫刻家 中島 睦雄

二、三年前の事になろうか、私は那須のあたりを行ったり来たりしていた。あのあたりには、小さい美術館や珍しい博物館などが幾つもあって、殆ど無計画に出かけて行っても、結構楽しめる。

私は、家内と二人であてもなく走っていた。山から少し離れて雑木林の続くあたりまで来ると、右側に小さな喫茶店があるのに気づいた。特別にモダンであるとか、古風であるとかいう感じはなく、ごく普通の建物である。

私たちは、別に大した期待もなく、ただ少し休めれば良いと思って中に入ってみると、上り口の所から素晴らしい本物の木材が使われており、さりげない作りなのに並々ならないこだわりが部屋全体に溢れていた。

小さい部屋にはテーブルが五、六ブロックくらいしかなく、奥には暖炉があつて、お客は誰もいない。クラシック音楽の流れる静かな空間を、私達二人が独占している形だった。

コーヒーを運んで来た上品な女性が、余り風采のあがらない私達に声をかけた。話しの中で「市原多朗さ

んも時々お寄りになりますのよ。」と言う。「その人、何の人ですか？」と聞き返した。「今、イタリアで活躍しているオペラ歌手なんですよ。」との事であった。私は初めて聞く名前であった。しかし、とに角素晴らしい歌手らしい話だった。私は自分の不明を恥じた。と同時に、市原多朗という響きのきれいなオペラ歌手の名前を覚えてしまった。

それから何日かたって、車で走りながらラジオを聞いていたら、何とあの市原多朗さんが出ていたのである。アナウンサーの解説によると、市原多朗さんは、現在海外で活躍している男性歌手のトップだ、というような事を言っていた。私は嬉しくなつて、目的地に着いてしまうのを恐れながら道端に車を止めて聞いた。歌声も聞いた。多少の予備知識もあったせい、その歌に感動した。こういう人を今まで知らなかったのだ。

私は、色々な人にこの話を話した。或る時、私の所に時々絵を描いて見せてくれるMさんという若い人に話したら、市原多朗さんのCDを買ってきてくれた。私は、Mさんと一

緒に、アトリエでガンガン音量をあげて聞いた。イタリア歌曲を十五曲。素晴らしい。文字通り感動した。

そんな事があつてから、私は展覧会の為の彫刻の制作に入った。きれいな体型をしたMさんにモデルになつてもらい、いろいろとポーズをとつてもらつてデッサンをする。何通りかのポーズの中から、寝ころんだポーズに決めた。大きさは約一米八センチ程。細い木材と針金などを使って芯棒を作る。それに柔らかく練りこんだ粘土を付けていくのである。Mさんは我慢強く、同じポーズでじつとしていてくれる。彼女が飽きてしまわないように、私は静かなバイオリンの曲を流してみた。レオナルド・ダ・ビンチはモナリザの制作をする時に隣室から音楽を流したという。そういう大天才の小さな部分をマネするのも楽しいものだ。

粘土を付けたら削り取ったりしながら次第に形ができてきた時、私は或る事を思いついた。稲の育成の時にシュールベルトを聞かせるとおいしい米がとれるとか、乳牛にモーツァルトを聞かせると牛乳の量が多いとかおいしくなるとか。

私は私の使う粘土に市原多朗さんの美声を聞かせようと思った。そこで、MさんからもらったCDを、制

作の途中くり返しくり返し流して、粘土に聞かせた。もち論モデルのMさんも聞く、私も、実に良い気持ちで聞きながら粘土付けをする。こんなしあわせな事はない。そのうちに、十五曲の中で特に好きな曲がでてきた。十三番目にロッシーニの亡命者という曲が入っている。三分二十四秒のこの曲が、素晴らしい私を励ましてくれる。私は粘土でよれた指で、十三番を何度も何度も流した。Mさんは「また十三番ですか？」と笑う。

市原多朗さんの素晴らしい歌は、私に大きな力を与えてくれた。二時間の制作を連日続けたのだが、私は決して疲れなかった。良い音楽はやはり人間の精神を高めてくれるのである。美しい音楽がMさんの体を一層美しく見せていたし、粘土だつて生きていたのかも知れない。

私は、最初に市原多朗さんを教えたくれたあの小さな喫茶店「りんたろう」の美しい女主人に電話した。「市原多朗さんを毎日聞いてますよ。ラジオでもやってみましたね。」

そして「あの歌に励まされて彫刻作品を作りましたら、傑作ができたんですよ。」と付け加えようと思ったが、それはやめておいた。

2つの文化に生きる
40日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

新年おめでとう！

毎年どんなに疲れていてもどんなに忙しくても、生きる原点であるイエス・キリストのお誕生をお祝いして一週間足らずで迎える新年は、すべてが洗い流されて、新しく生まれ変わったような不思議な気持ちになる。

まるで、イエスさまが御自分のお誕生日に私たちに「心を入れかえて、新年を迎えなさい」とおっしゃっているようである。何もかも新しく、何に対しても驚きの目を持って今年も生きて行きなさいと仰っているようである。

「新しい」と言えば、私は最近、電子カードに魅せられている。Eカードであつて、所謂、Eメール

ではない。夫に言わせると、これは決して新しいものではなく、アメリカでは何年も前から友人間、家族、親戚間で送り、送られてきているらしい。

私が初めていただいたのは昨年の一〇月。九月末五日間に渡り、アジア教会婦人会議(ACWC)の本部の役員達が日本で役員会を開催し、その後マレーシアに帰った会長さんからお礼のEカードをいただいた。心地よい音楽にのせて画面に絵が表れる。そして、そこには心あたたまるメッセージが次から次と書き記されているのである。なんと、すばらしいアイデアだろう。私も思わず、Eカードで返事を送った。送られて来たカード会社にアクセスすると用途にあった様々なEカードのリストがあり、その中で自分の気持ちにぴたり合うものにメッセージと名前を加えて相手に送るだけでいいのである。送ってしまった後もどんなカードを送ったかどんなメッセージだったか確認したい時はいつでも確認できる。又、気にいったカードがあれば、何度でも開き、そのメッセージを読むことができる。昨年はそのマレーシアの会長さ

んから、もう一つすてきなEカードをいただいた。「もし、これを今まで見たことがなかったら、リラックスしながら楽しんでください。風景がなんとも言えず、壮観です。」と言うメッセージが付け加えられていた。そのカードの中身は？様とのインタビュ―と言う詩であった。作者は不明らしいが一言一言がほんとに重みのあるすばらしい詩である。背景となっている壮大な山や海や川等の自然の景色、それにあった音楽、リズムに合わせて画面がどんどん次に進んでいくので、英語でさささと読むのは結構忙しいことだが、読み終わったら後に何か肩の荷がおりて安堵感が残った。

ある人が夢の中で神様をインタビューした話である。「神様、ちょっとお時間ありますか？」とある人。「私の時間は永遠だから。」と神様。「人間について何が一番驚きですか？」とある人。そして、神様はこう言われた「人間は幼年期はすぐに飽き、急いで大人になり、又、子どもの頃が懐かしくなること。お金を儲けるために健康を失うこと。いつも未来のことをしきりに考え、現在のことを忘れ、

結局は未来にも現在にも生きていないこと。絶対死なないかのように生き、死ぬ時はそれまで全然生きてこなかったように死ぬこと。」ここで神様はその人の手を握り、暫く沈黙が続く。今度は「親としてあなたがこどもたちに学んで欲しい人生の教訓は？」と会話が続いて行く。「決して人が自分を愛するように無理強いはできなく、ただ、自分が愛されるようになること。他人と自分を比較しないこと。許すことを練習することで人を許せるようになること。そして、お互いに許すだけでなく、自分自身をも許すこと。愛する者の深い傷を開くにはほんの数秒しか、かからないけれど、それを癒すには長い年月がかかること。富んでいる人とは一番持つていない人であること。2人が同じものを見ても全く違った見方をする。」延々と続いたインタビュ―の最後に「他に何かあなたのこどもたちに伝えたいことがありますか？」と聞くと、神様は微笑んでこう言われた。「いつも、私がここにいることを覚えてるように。」

原田家日記

ここで過ごす二回目の年越しになります。この一年を振り返ると、ありがちな表現ですが、長いようで短い一年といったところでしょいか。誰も先を占うことなど出来ませんが、まさに二〇〇三年という年は僕にとっても光の子どもの家のすべてにとってもいろいろなことがあり、到底予想することも出来ないようなことがありました。人生や考え方が大きく変わった年、と言っても過言ではありません。子どもと共に心から楽しんだこの夏の思い出は、僕が過ごした子ども時代の遠い記憶よりも懐かしく感じます。これからまた、どんな困難や喜びが訪れるか分かりません。

今年も、今を大切に、未来に希望を創ることが出来るよう子どもたちと一緒に生きていく決意です。

小西 剛史



季節のおとずれ

市川家

寒い北風が吹きつるの毎日ですが、皆様いかがお過ごしですか？

二〇〇三年は、子ども達ひとりひとりが新しい環境で頑張った一年でした。

悠子は社会人一年生として、休む事無く仕事に励んでいます。美季は、小さい頃から一緒にいたかづきが亡くなり、彼女なりに自分の生について考えた事と思います。静一は、小学生になり、学校では精一杯勉強に運動に励んでおり、マラソン大会では転んでも走っていました。要、美也子はすっかり幼稚園に慣れ、幼稚園に迎えに行くくと「早い」「全然遊んでない」と幼稚園が大好きな二人です。

生きている事の尊さをかずきから教えてもらった二〇〇三年。二〇〇四年は、ひとりひとりが生きている事を感謝し、お互いに喜びあえるような一年にしたいと思えます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

市川 美穂

光の中で

佐藤家

新年のご挨拶を申し上げます。

中二の華美とは四年間共に季節を重ねてきました。どんな手段を使っても自分の要求や不満をぶつけてくる華美と何度もぶつかり合い、その度に華美とどのように関わったらいのか、凍り付いた華美の心を暖めるためには何ができるのか自問しながらも華美のマイナスの言動に振り回され、華美の気持ちに寄り添うことができません。こんな私が担当者で本当に申し訳ないという思いしかありません。それでも華美は自分の精一杯の力以上を振り絞り頑張っていました。中学校では伝統ある剣道部で練習に励み、心も体も鍛えられている姿が応援に行く度に感じます。持久走大会では五位に入賞したり、合唱コンクールではクラスで優秀賞を獲得しました。

トラブルを繰り返す度に「こんな家出て行く。」と吐き捨てていた華美が先日寝る前に「嫌なことも悪いこともいっぱいあったけれど、

洗濯物は干したの！部屋は片付けたの！トイレ掃除は終わってる？と、まるでシンデレラをいじめる継母のようで、お姉ちゃんたちがかわいそうになります。ですから、口うるさい！と思っているのは僕だけではないはずですが、お姉ちゃんたちは文句も言わずに言われたことをやっています。そんなお姉ちゃんたちを偉い！と思います。それから、倉ちゃんは意地悪です。

他のお家では、朝起きられないと大人のの人に起こしてもらっているようですが、倉ちゃんはお姉ちゃんたちが寝坊しても知らん顔。しかも寝坊した翌日は、朝ごはんもお弁当も自分で作らなくてははいけない！というおまけ付き！まあ、そのおかげで目玉焼きや炒り卵を極めたお姉ちゃんもいるようです。

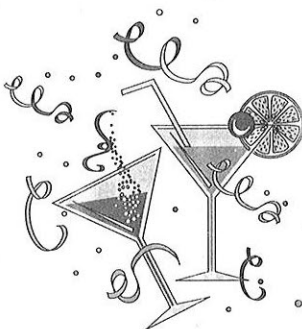
倉澤家のお姉ちゃんたちは、今年もこんな恵まれない環境の中で頑張ります。もしも、どこかで見かけたら「がんばっているね。」と声をかけてあげて下さい。

そして僕も、倉澤家の末っ子長男として今年もがんばります。

倉澤 智子

あかり窓

心理室から



新年のご挨拶を申し上げます。今年もどうぞよろしく願います。

前号でもお知らせしましたが、卒園が迫っている環くんはたくさん不安に押し潰されそうになりながら、私たち職員に様々な形でヘルプサインを出します。そのサインに充分に応えられずに彼も私たちも無力感でいっぱいになってしまっています。先日彼が怒鳴り散らしている時に、洋くんが私に言いました。「積さん環ちゃんとも遊んであげたら？楽しくて気持ち悪くなるよ」。私は環くんが心を乱して暴れないようにするためにどう対応するべきかと大人の視点からなかなか抜けられずにいます。洋くんの言葉に自分が恥ずかしくなりしました。今年もたくさん間違えや失敗を犯してしまいそうですが、子どもたちに訂正してもらい

ながら頑張っていきたいと思えます。

積 みどり

子どもたちの季節

仙道家

お陰様で新しい年を迎えることができました。ありがとうございます。

さて、年の瀬も押し迫った十二月半ば、仙道家に新しい仲間が加わりました。

新しい仲間を迎える時、どの担当者もそうですが、「ぜひ、私のグループへ」「ぜひ、うちへ」とはなかなか思えません。

自分が担当者で良いのだろうか。落ち着かない家の状態で大丈夫だろうか、ととても不安になります。でも、入所を待っている子どもの抱えている不安に比べれば、と思えますし、こんな私で良かったら、と思います。

それでも、緊張や不安は抱えたまま、小学六年生の龍治を迎えました。

瞳のキラキラした少年ですが、勿論、龍治も緊張と不安でいっぱいでした。

新しい仲間を迎える度にいつも思いますが、周囲の子どもたちのあたたかさや懐の広さです。



河のほとり

倉澤家

昨年中は、大変お世話になりました。本年もどうぞよろしくお願い致します。

さて、今回も僕、成梨が倉澤家の様子をご報告します。

倉澤家にやって来て八ヶ月にしろうとしていますが、僕が今思っていることは、倉ちゃんは口うるさい！ということです。朝から、

牙弥や竜也は、「お兄ちゃん」と龍治を慕い、他の子どもたちもとても親切で好意的です。

私は「担当者」ですが、いつも何もできません。勿論、何かできると思っている訳ではありませんが、周囲の子どもたち、スタッフに助けられてばかりです。

龍治も少しずつ緊張もほぐれ、学校や家での生活にも慣れてきました。

どの子どももそうですが、その小さな体に負っている荷はあまりにも大きく思われるのです。一人で負いきれなくて当然です。龍治と肩の高さを同じにし、一緒に負えるものでありたいと思います。

池田 祐子



現場から

続・光の子らしく

⑩ 岩崎 まり子

新年のごあいさつを申し上げます。皆様、いかがお過ごしですか。

先日、ずっと丘美ちゃんが行きたがっていたディズニールランドへ里奈ちゃんと3人で行ってきました。

「いっぱい電車に乗るの？やったあ！楽しみ！」と、最初は絶好調だった2人も、電車を乗り継いだりしているうちに、だんだんトーンが落ちてきて、それでも「あと、ちょっと？まだ？もうすぐミッキーに会える？」と、自身を励ましつつ歩き続けました。

そして、駅に着くやいなや、「ここ！？ねえ、まり子さん、ここにミッキーいるの？やったあ？」と入場門ま

で、もどかしいらしく、ミッキーを捜すためなのか、つい小走りになるその背中揺れるリュックサックが愛らしく、私までつい笑いながら走ってしまった。

ゲートを入るとミッキーたちが居たのですが、時間制限があり、残念ながら一緒に写真を撮ることはできませんでした。ちよつとふくれっ面で、ミッキーたちをにらみつけていた丘美ちゃんでしたが、リズムミカルに「ぎーんねん。」と言って手をとると、まねして「ぎーんねん。」とにつこりし、次なる目標のメリーゴーランドへ。

コーヒークップ、ダンボ、ピーターパン……。もう楽しくて仕方がない

という様子でゲラゲラ笑っている丘美ちゃんを見ているのは、とても幸せな気持ちでした。キャラクターが勢揃いする、にぎやかで美しいパレードでは、音楽に合わせて里奈ちゃんと二人、腕を組んで踊ったりこぼれたり、それはそれは楽しそうでした。

そのパレードで、ミッキーたちがたくさん星を皆に向かって飛ばしました。里奈ちゃんも丘美ちゃんも人混みをかきわけ、一生懸命拾い集めていました。

「あ、みどりだ！」「あ、銀！」「あ、丘美ちゃんにあげる！」「大きいのもあった！」「あんまり2人が一生懸命集めているので、つられて私も集めてしまい、スタッフに「芝生には入らないで下さい」等と注意を受ける始末です。

そろそろ満足したかな、と思う頃、



いきなり丘美ちゃんはその星々を捨ててしまったのです。怒ったような顔をして、せつかく集めた星をばつと……。一瞬、里奈ちゃんと私はあ然として丘美ちゃんを見つめてしまいました。ちよつとショックな場面でしたが、「いいの？」と尋ねると「いい。どうせいらぬし。」と丘美ちゃん。それは悲しい言葉でした。たくさん辛い思いをしてきた丘美ちゃんに、心ゆくまで、存分に、最後まで楽しんで、喜んで欲しかった。でも丘美ちゃんは、途中放棄し、5才にして「どうせ」と自分を守る術しか持たないのです。他の人に否応なく奪われてきた楽しみ。そして、他の人に否応なく理不尽に与えられてきた暴力。奪われるより放棄。そんな5才の子どもの心に思いを巡らせながらの帰り道、「本当に楽しかったね。きれいだっただ。」と星空を見上げる丘美ちゃん。星空とパレードのイルミネーションをだぶらせたのでしょうか。

新しい一年もたくさんの楽しみが丘美ちゃんにあるように願います。そして、誰よりも私自身が理不尽な関わりをしないよう祈ります。皆様、どうぞこの一年も、よろしくご指導下さい。

養護メモ

100

いのち

菅原 哲男

新しい年の初めにあたり心からなるご挨拶を申し上げます。

かずきの召天からうつむきかげんな情緒を引きずらないようにと心しながらも、クリスマスを終えて新年を迎えることになった。

それにしても、ひとりの子どものいのちについて、いや、人の命についてこんなに考えさせられたことはない。

かずきの事件後三ヶ月余の間に二回の臨時理事会と定例理事会と併せて三回審議して対応してきた。ひとりの子どものいのちを、生死に関わらずその尊厳を創り上げ守り続けることを基点にして考えてきた。

かずきのいのちⅡlifeそしてともに創る子どもたちとの暮らしⅡlife、また私にとって夕暮れも深まってきている生涯Ⅱlife。

ハイデッガーは、死は追い越すことの出来ない、その上いつでも切迫している可能性である。現に存在している者はあるべきところから頹落している。その頹落している存在をおしやべりで誤魔化さ

ず、沈黙して良心の呼びかけを聴き取り在るべきところに立ち返る。・・という。

かずきの死と向き合うために沈黙して聴き取り対応を探り続けてきた。

親しくさせて頂いている、京都府立大津崎哲雄教授から心を込めたお便りを頂いた。

「光の子」一〇五号を拝読し、かずき君の事件につき知らされました。彼をケアしていた職員の方々以上に大きな衝撃があったことでしょう。

おさな子の生命を召される主のみ旨は何か、ずいぶんと苦悩されたと拝察致します。私は貴施設の運営とはまったく関わっておりませんが、何か深い人知を超えたみ旨がこの幼い魂による「あがない」の死には込められている気がしてなりません。

「これまで気づかなかった何か大きな変化がここでの生活に迫っている予感がある。・・それから逃れずに、そのことが私たちに与えるメッセージを確実に受け取り、

かずきの記念としなければならぬ。・・。こんな風な善い変化はかずきの事故からだった、といつまでも確認できるように」とある決意表明がこのことを教えてくれます。

召天された者の地上の命より以上に、より深く具体的に私どもの歩みを導いてくれるのは、召天された者との霊的協働であろうと思います。

召された者は天国でのんびりと蓮の上で黙座しているのではなく、未だ地上の生を保って「主のみ旨」、社会正義・幼な子の福祉・最も弱者の幸福・のための労苦する者のために協働してくれており、共同戦線を担ってくださっているのではないのでしょうか。そういう意味で、かずき君は天国で日々成長し続けると思えます。あたかも光の子どもの家で生が依然として続いているように。私どもが天に召された時に彼が十一歳のまま心身がとどまっているということはあり得ないのではないのでしょうか。

終末時に、あるいは再臨の日に、光の子どもの家で与えられた人間らしい生を継続して、いなそれ以上にイエスの傍らで確実に「人」として成長していくかずき君の姿

に再会できることは大いなる喜びである。そういう事実への待望こそキリスト信仰における復活の側面だと思えます。

どうか悲しみを背後に送り、かずき君との共同戦線で日々の児童養護の営みを建て直してゆかれるよう祈っております。」

「光の子」一〇五号で時系列的にご報告させて頂いた。

他にも励ましや痛みの便りや電話など数十通をお寄せいただいた。それからもう判読できるように理解不能な医療に関わる疑問が払拭されないという問い合わせも多くの方々・特に報道関係者からあった。争いを減じることが私たちの仕事を具現する具体的な方途である。

かずきの死に関わった者たちが、かずきの生や命がなかったかのようにならぬことを祈るにはいかにないのである。

関わった者たちすべてが、沈黙して良心の呼びかけを聴き取り、人として誠実に向き合うことが何よりも大切なことと考えてきた。

そう考えて、直接かずきの医療にあたった医療機関の責任者、また加害者やその関係者とも「かず



きの死と逃げないで誠実に向き合
い、何が大切なかを考えよう。
過ちを認め厳しく反省し、再発を
防止するために心と力を惜しまず、
かすきの命によって関係を持つこ
とが出来たことを、『善いこと』で
あったと言えるようにしよう」と
呼びかけ伝え続けてきた。
ある者は聴き、ある者は厳しい
反省を自らに強いてきていた。
しかし、このところ、医療も、
政治も、行政も、そして社会福祉
の基礎である公的扶助も、また事
故に対する保障を担うべき社会的
機能などからも、また、司法さえ
も、この社会でかすきの死の尊厳
に心を致すよりも、彼が生きたこ
とさえ見失いそうなほどに、自ら
の利害や保身、打算が渦巻き、悲
しい空虚な轟音をあげ続ける状
況の中で、かすきの死の尊厳を確
実に守ること・どうすればそれが
可能なのかについて考え続けてい
る。

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

10月1日▶11月末日

10月

幼児9名 小学生12名 中学生6名 高校生8名 措置外2名
計37名

- 1日 第24回小舎制養育研究会総会・研修会京都大会
- 2日 児童養護施設関東ブロック職員研修会箱根大会
- 6日 光の子どもの家東側の道路が北側県道とつながり
整備されて以来、朝夕の通勤時間の交通量が増え、
速度も相当上げている状況を説明し、改善を栗原
肇大根町議会議員に陳情。
- 8日 恒例となってしまうほど続けられてきた大根町
後援会・赤十字奉仕団合同の構内整備ご奉仕
- 15日 東日本児童養護施設職員研修会が北海道で
- 18日 聖学院大学生10名が子どもたちと遊ぶご奉仕
- 19日 夏休みオープニングパーティ
- 21日 埼玉県川越児童相談所来訪して情報交換と協議
- 28日 東京医科歯科大学大学院来訪しケース研究
- 31日 児童自立支援施設・児童養護施設協議会が埼玉県
知事と面談 次年度予算要望と懇談
- 聖学院100周年記念式典
- 11月3日 第71回理事会役員人事を取り決め、渡部か
ずきの事故後の対応を協議診療にあたった大久保
病院へ医療過誤などの防止策及び医療水準の向上
児童養護施設への理解を求める申入書を送付する
こと 安全教育を更に徹底するなどを決めた。

- 第19回感謝の集い 渡部かずき追悼及び福島前理事
長召天1周年記念と併せて挙行 駒宮肇前理事聖学院
大学酒井裕美子 東京電力大橋清栄の各氏に感謝状を
贈呈し、大根町町長などの来賓をお迎えして子ども
たちの成長を確認し和やかな一日
- 5日 東京の児童養護施設バット博士記念ホームから職員10
名が来訪し見学と交歓のひととき 12日も
小学生のショートスティ受け入れ 7日まで
- 大分大学森望教授来訪して歓談
- 15日 後援会・愛育班主催の昼食会を手打ち蕎麦で
- 17日 聖徳学園大学成瀬ゼミ実地演習20名
- 18日 鴻巣市立赤見台中学ふれあい授業に菅原施設長が
- 19日 前山正入所原田家伊藤保育士担当
- 21日 全国児童養護施設協議会高山大会
- 24日 江森ヘヤーサロン調髪ご奉仕 感謝
- 25日 先に送付した申入書の大久保病院からの回答書
- 27日 大根町虐待防止ネットワーク立ち上げ
- 30日 第1アドヴェントをささやかに祝い上向きな生活を
物品ご寄贈者 小柳千晶 小田原バプテスト教会 小早川典子 豊国
道江 鈴木昭一 梓沢あずさ 遠藤千代子 パーラーみます 春山典子
鎌田和子 オオタニ リズム時計 須藤喜代春 山野井麻子 オカラカ
フェ 岩槻教会 荒川慶一 小原順子 横村スミ子の各位様 今年のお
支えに感謝して よい年を！（くら）

/// 反 射 光 ///

☆新たな2004年が守られ恵みで満
たされますよう祈ります☆新しい年に
子どもを未来とするような希望を持ち
たいものです☆子どもを大切にしない
国はいずれ滅びるといわれます☆戦地
に赴く兵士を大寫しにしながら義務教
育費の削減をあつさり決めるこの国は
果たして子どもを未来とすることが出
来るのだろうか☆配偶者特別控除の廃
止に伴う次世代育成対策が動き出しま
す☆地域振興券の時も感じましたが児
童手当の年齢を拡大するという大判振
る舞い？で次世代が本当に育ち出生率
が上がるかと為政者は信じているのだろ
うか☆そのおこぼれに与ることになり
そうですが社会的養育の基盤が子育て
先進国とは比べものにならないほど貧
しいのです☆比肩できるような抜本的
対策は十年先にも成るだろうかと思え
ません☆心熱い職員の決意や情熱に期
待する以外にないこの国の状況のなか
で、深傷を負った子どもたちとの関わ
りを、新たな決意を自らに重ねて今年
も励みます☆更なるご支援を！（哲）